

平成 27 年度第 1 回京都市域地域コミュニティ活性化推進審議会

- 1 日 時 平成 27 年 7 月 2 日 (火) 午後 6 時 30 分～8 時
- 2 場 所 職員会館かもがわ 3 階 大多目的室
- 3 出席者 委員 1 2 名 (欠席：高橋委員，野池委員，平田委員)
事務局 (寺井文化市民局長，林地域自治推進室長，猪田地域コミュニティ・北部山間振興部長，松村地域づくり推進課長，牧村市民活動支援課長，他)

4 概要

「京都市地域コミュニティ活性化推進計画」改訂に向けたテーマの検討について

- (1) 資料 1 に基づき，事務局からテーマ 1 「集合住宅 (マンション等) におけるコミュニティ活性化，自治会・町内会への加入増」について説明

◎長上副会長

マンションと言っても，一括りでは議論できない。管理組合が自治会と同じ組織のところもあれば，別々の組織のところもある。自治会加入の方式も 1 棟加入というかマンションごと加入しているところもあれば個人個人で加入を任せているところもある。管理組合を自治会に位置づけるような意識的な取り組みが必要。マンション住民からすれば，地域と関わることで自分の所有する不動産の価値も上がるし，地域にとっても安心となり，コミュニティ活性化へとつなげることが大切。

また，京都は単身者世帯の若年層が多いが，その中で学生が地域活性化を担える存在であり，大学との連携が不可欠。

◎森委員

今後，管理組合を窓口とした連携を深めていけば，地域との関係も今までとは違うものとなる。

○吉田委員

京都は学生の街なので，学生が地域に，もっと入ってもらえるような仕組みが重要。

◎立木会長

京都に引っ越してきた学生が，京都に住民票を移していないという現実が見えてきた。

○宮西委員

高経年分譲マンションは比較的年齢層が高く，マンション内のコミュニティが確立されていると考えがちであるが，若い人が周期的に入ってきて，何十年に 1 回かはメンバーが大きく変わり，改めてコミュニティを確立しなければならない実態もある。地域の夏祭りでは，芸大の学生さんのブースを設置して，似顔絵を描いてもらったり，顔にペインティングしてもらったりしており，子どもが喜んでいる。学生を地域のコミュニティに取り込むのは有効だと思う。

◎立木会長

計画には、そういったお話をコラムでぜひ入れたらいいと思う。

○山本委員

若い人が町内に入ってきて、生活時間が地域の活動時間と相違するので町内会に参加するのが困難なケースが多い。若い人は生活時間が違って、夜 10 時過ぎに帰ってくる人もいる。

○宮西委員

マンション住民でも若い人は家にいなかったり、仕事で遠くに出かけたりしている。

◎立木会長

マンション事業者の販売も新築マンションでは、地域のコミュニティに配慮せずに販売していることも現実にはあるようだ。それと若い方は分譲マンションでも、生活時間の違いから、なかなかコミュニティに関わるのは難しい面もある。

○森委員

若い方は昼間の町内会の仕事はできないから、昼間の仕事は年配組が応援するという、2つの体制も考えられる。若い方は夜の会合には参加することで、企画には関わってもらい、そこから先は年配の昼間家にいる人が担ったりする手法もある。

◎立木会長

マンション住民といっても皆が同じではなくて、年代層もちがっているし生活時間も違う。そういった違いをどううまくすり合わせして、例えば昼間の会、夜の会、あるいは週末の会といったものを合わせ技で考えていくというようなことが必要。

○森委員

あるマンションでは、地域住民とマンション住民が活発に交流しており、逆にマンション内のコミュニティは意識していない。そのマンションは 39 戸しかないのに、集会室はものすごく大きい。初めは、その集会室を地域の住民のみなさんに見に来てもらい、そして地域の人たちとお茶を飲み懇談していた。それからは地域とマンションで交流を深めてきたが、今では、地域の方々が高齢化している。マンション住民は、まだ若く、防災の面では地域の人たちはマンション住民に頼っている。管理組合が窓口となって、地域とマンションの新しい関係を創りあげていくことが必要。

◎立木会長

私もマンション住まいで、マンションの中だとあいさつするが、マンションの外では同じマンション同士でもあいさつしない。マンションには、そういう内外（うちそと）というのがある。

○宮西委員

マンション内でのコミュニティがなければ、地域とのコミュニティを築くことは難しいと思う。マンション外と仲良くする前に、マンション内で1つの大きなコミュニティがあれば、「●●学区にある○○マンション」が、「○○マンションがある●●学区」という形に変わっていくと思う。

◎立木会長

マンション内である程度のつながりを前提として、地域住民とも交流できる。マンション内がまとまっていないければ、窓口がわからないが、管理組合がコミュニティ機能を持っていれば、管理組合通じて地域とも交流できる。地域に開放できるような集会室をマンションに設置できればマンション住民と地域住民が交流しやすく、このような取組みは必要。

(2) 第2テーマ「地域組織(団体)の在り方及び活性化策」について、事務局から説明。

○山本委員

学校運営協議会の活用や子どもを通じて保護者が地域活動に参加できるような取組が必要。例えば「京都市子ども会育成連絡協議会」とう団体が各行政区にあるが、上京子ども会では、親子写生大会や親子芋掘り大会などをやっており、子どもの親だけではなく、地域の大人も一緒にした行事にしていけば、もう少し広がると思う。

◎立木会長

P T Aにコミュニティ(C)を加えて「P T C A」という、地域も巻き込むという話。

○濱川委員

お祭りなど、いろいろな行事を地域の方、自治連合会の方やおやじの会などとしているが、年々自治会に加入される方が少なくなっている。町内会に入りたくない若い世代もいる。P T Aの役員も若い世代なので、町内会に入りたくない、役もしたくないという人がいるが、子どもが小さいからこそお母さん方の知り合いができるし、地域の人に子どもを認識してもらえ。私は京都の人間ではないが、子どもは地域の人にも育ててもらいたいので、以前から町内会でもずっと役をしている。P T Aでも地域の人見守られた子育て環境の大切さについて話をしている。

◎立木会長

町内の子どもたちの名前を知っているという地域であれば、お母さん方は安心して子育てできるのではないと思う。地域とつながって関わることはすごく大変そうだけでも、逆にメリットもあるので、そういった点をアピールすればよい。

○坂本委員

K R P(京都リサーチパーク)と大阪ガス、隣接する3学区が共同で防災訓練を毎年している。各町内1名ずつ参加してもらっているが、小さな町内会では、出席者を確保できず、欠席が多い。どうして

も町内会には「適正な世帯数」が必要だと感じた。

◎立木委員

あまりにも町内会の戸数が小さすぎるといろいろな地域活動に行けないので、ある程度戸数が必要。そうすると統合というようなことも考えても良いというような意見もある。

○山本委員

経験上、町内会の適正な世帯数は50世帯くらい。世帯数が少ないと役がすぐに回ってくるので、それも加入を嫌がる原因のひとつ。

○濱川委員

特定の人が役員を継続しているケースもあり、負担が集中している。

○山本委員

順番に役員が回るというのもしけない。50軒あったら50年に1度しか回ってこない。

◎立木会長

50軒あったら、「この人に任せておいたらええやろ」という人が存在する。

○山本委員

昔は10年も15年もやってくれた人がたくさんいたが、今は1年で交替が多い。

◎立木会長

地域活動がしっかり安定するためには、一定程度の世帯数が自治会・町内会にないといけない。

○宮西委員

町内会長をしていた時、同じ人に役員を何回もやってもらうのはもったいないので、みんなに経験をしてもらおうと思って、少年補導や体振などいろいろな役を毎年変えていって、結局5年間で40人くらいの人に役員をしてもらった。体振はやはり大変なので、「ぼくも手伝うし、ぼくが年間の体振の行事に全部出ます」と説明した。「全力で役を行うべき」と押しつけるのではなく、「できることだけやってくださいね」という風にした。このように「次にやろうかな」という含みをもたせて終わらせることを、会長として意識した。そうすれば、6年後、7年後にまた役が回ってきても、抵抗なく引き受けてもらえる。

○村上委員

大人になってから地域活動を啓発するのではなく、子どもの時から地域の大人の人がどんな活動をしているのかを知ってもらうことが大事。「子どもたちのために一生懸命活動している」ということが、子どものときに理解できないと、大人になってからはなかなか難しい。PTA活動、学校運営協議会にも

コミュニティ活動があるが、その中で、特に学校運営協議会には地域の方に多数参加していただいているので、その方たちと関わり、そして地域の良さを見つけたりすることも同時にできる。PTA、学校運営協議会、地域、学校が連携して、「みんなで将来の担い手を育てているという意識でやりましょう」という形が大事。

◎立木会長

子ども自身を巻き込んでいくことで、将来の地域の担い手を育てることが非常に大事。「おやじの会」は自治連合会、学校の両方関係しながら活動している。

○吉原委員

うちの町内は13世帯で、規模が小さいので、役は2年ごとに回ってくる。年1回の運動会の時だけは親戚なども呼び、皆総出で参加している。また、子どもが少なく、地蔵盆は開催していないので、隣の町内の地蔵盆に参加しているが、他にもそういった町内が京都市内には多いのではなか。

◎立木会長

町内会の統合というのも急に線引きするというよりも、それぞれの地域活動の単位で地蔵盆の時には一緒にやってもいいとか、運動会はこっちで開催するとか、緩やかに連携するようなところから始められたらどうかと思う。防災力を考えたらやはり40~50軒の世帯がいらないといざという時には担い手がないというのものもある。

○松本委員

わが町内も次世代の育成が課題になっていて、高齢化が進んでいる。空き家も多い。会長は抽選なので、責任感もあるようでない。

◎立木先生

地域における世帯は減っているが、マンション住民と上手に関われば、地域単位で活性化できる可能性はあるのではないかな。

○吉田委員

地域の事業者が地域活動に参加したいと申し入れているが、相手にしてくれないケースもある。地域の事業者は、会費を払っているが、地域からは決算書も見せてくれない。地域は、事業者を地域活動に加える意識がない。従業員には若い社員もいる。若い社員が地域活動することによって地元の自分のところの地域に入って活動できるのではないかな、ということを含めて申し上げるのですが、なかなか地域活動には参加させてくれない。

○坂本委員

先ほども言ったが、京都リサーチパークや大阪ガスは周辺の学区と連携して防災訓練など、多くの活動をしている。阪神淡路大震災の時に、敷地の一部を地域住民の避難場所に提供いただいたことがきつ

かけであり、会議室は手続きをすれば町内会にも使わせてくれる。

◎立木会長

まとめると、マンションと地域のかかわりの話や、事業者の中には地域と関わりたいと思っているところもあり、そういう事業者は地域から見たら財産だという議論もあった。多様な住民参加が地域力を高めることができる。多様な住民の中には事業者も当然入っており、このような仕組みを是非考えていきたい。

マンションの話と同じ構造になっている。従って取組の中で、マンションの側でも地域との交流をどうしようかがこれからの課題であるし、地域の中の志の高い事業者と地域がどう交流していけばいいのかを是非継続的に考えていければと思います。

(3) 第3テーマ「地域コミュニティを支える各主体の連携強化」について、事務局から説明。

○吉原委員

私が「おやじの会」に入るまでは、小学校のPTAの会長をしていた。この時に「おやじの会」を作ることとなり、まず小学校の「おやじの会」を立ち上げ、「京都おやじの会」は平成15年に立ち上げた。「京都おやじの会」では、会長任され「京都学生祭典」を巻き添えにして、「京炎そでふれ！」の踊りや清掃活動などの学校活動も行った。

「おやじの会」の交流会では、女子プロ野球を呼んで野球教室を行っており、地域でも応援するきっかけとなっている。その他にも、京都市教育委員会の方から講演会の講師のご紹介をいただいたり、地域の方では少年補導委員会とも連携しているので夏祭りでは、かき氷などにも協力している。先日は同志社大学のタップダンスのクラブの皆さんに来ていただいて、18人ほどの子どもが集まった。

○松本委員

「おやじの会」については知らなかったが、NPO法人との連携など、共通している部分が非常に多い。NPOでも活動では、京都市の連携促進事業に採択され、元待賢小学校と連携して寄付を集めた。寄付の集め方の難しさ、事業所が地元ではないので、いかに地域に名前を浸透させるかに苦心した。みんなで掃除をし、ゴミ拾い、花づくりなどいろいろなことをした。いかに連携が大切か、協議していかなければいけない。それから連携には継続性が重要。

◎立木会長

まとめると、まず1つは、マンションと地域の関係、2つ目は、事業者と地域との連携、3つ目は、学校と地域、NPOと地域。ぜんぶ地域と連携するいろいろな主体がいる。テーマ3では、連携する際に、お互いの組織の窓口になる人を通じていた。顔が見える関係を通じてこそ連携ができる。各組織と各組織を仲介してくれるような役割を「対協担当者」と言うが、そういう人がいれば、連携はうまくいく。「対協担当者」を確保していくのか、中間支援というような仕組みをどのようにしてつくっていったらいいのか。この人なら大丈夫、という信頼感のある人が間にいれば、連携することができる。だからそれをどう確保するのかというのがすべての検討会の縦糸になっている。

○諏訪委員

「対協担当者」をつないで、組織の縦割りをなくす。有機的な活動をしていくようなかたちを考えていかないといけない。

○長上副会長

P T Aが非常に大事だと改めて認識した。単身の方は少し違いますが、保育園・幼稚園から始まって、親が子育てしていく中で地域との関わりを初めて意識する。地域の活性化への取組で、人をどう育てるのかという時にP T Aを大事にすることは重要。

◎立木会長

P T Aはかつて学校と地域をつなぐある種の間支援的な、P T Aを卒業したら今度は地域活動を行うという、中間的な支援の機能がかった。しかし、今は、その機能がしっかりとは果たせてはいないので、それをもうちょっとパワーアップする必要がある。その時、大変さもあるけれどもメリットもあるよ、というのをどう伝えるかということもあるし、地域といろいろな主体との間で、様々な中間支援をこれから活性化していく必要がある。そのひとつのお手本がP T Aや社会福祉協議会ではないかと思う。これからは、N P Oがその中に入っていくのだと思います。

○山本委員

確かにP T Aはこれからの活動の原点。うまく子どもの頃から地域の関わりをつくるのが大切。そして父親や母親がどういう形で地域に入っていけるか。おやじの会も、せっかくの組織があるのに、それを地域に根ざして地域で動けるような組織にできればよいと思う。

○村上委員

P T A活動は昔からあるが、学校運営協議会は平成16年度にできた。運営協議会と地域のつながりとか、運営協議会とP T Aのつながりをもっと強化していったらいいのではないか。

◎立木会長

学校運営協議会をP T C Aというコミュニティも入って運営していく。離れ掛けている学校と地域、親御さんと学校をつなげるところが、学校運営協議会とかP T C Aという枠組み。これを上手に使ったら新しい器になるのではないかというご指摘です。ありがとうございました。

(閉会)